

論文種類【総説 (Review Articles)】

分野【空間】

---

## 地域と共にあるアートのかたち

アートを媒介とした地域資源継承の取り組み (大田区蒲田)

### The Form of Art Coexisting with the Community

Efforts to pass on local resources using art as a medium (Kamata, Ota City)

---

酒百 宏一

東京工科大学 教授

sakao@stf.teu.ac.jp

SAKAO Koichi

Tokyo University of Technology

---

本研究は、大田区蒲田を事例に『地域と共にあるアート』の可能性と課題を探るものである。町工場の歴史や文化的資源を活用した活動「オオタノカケラ」を中心に、地域資源の再評価や区民協働のアートプロジェクトが地域社会に与える影響を考察する。フロッタージュ技法を用いたワークショップ、工場見学、展示を通じ、町工場の記憶や大田区のものづくりがアートを媒介として共有・継承されるプロセスを分析する。また、これらの活動が地域活性化やシビックプライド醸成を促す一方、持続可能性や外部者との関係性といった課題も示された。本研究は、地域特性を活かしたアートの意義を示し、他地域への応用可能性や展望を提示する。

This study explores the possibilities and challenges of “art coexisting with the community” using Ota City’s Kamata area as a case study. Focusing on the “Ota no Kakeru” project, which leverages the history and cultural resources of local factories, it examines the impact of reevaluating regional assets and citizen-collaborative art projects on the community. Through workshops utilizing frottage techniques, factory tours, and exhibitions, the study analyzes the process by which the memories of factory operations and Ota City’s craftsmanship are shared and preserved through art. While these activities promote regional revitalization and foster civic pride, challenges such as sustainability and relationships with external participants were also identified. This study highlights the significance of art that utilizes local characteristics and presents its applicability and prospects for other regions.

---

キーワード: 地域資源, 町工場, 協働型アート, 持続可能性, 文化的資源アーカイブ

Keyword: Local resources, Small Urban Factories, Collaborative Art, Sustainability, Cultural Resource Archives

## 1. はじめに

現在地域におけるアートの役割は、単なる美的体験を提供するだけにとどまらず、社会的、文化的、さらには経済的な側面からも地域社会の発展や活性化に寄与するものである。この有効性については、これまでの多くの取り組みを通じて広く認識されている。[1]筆者は、フロッタージュ<sup>1</sup>という物の表面の質感や形状を紙に写し取る描画技法を活用し、サイトスペシフィック<sup>2</sup>な作品を制作することを主な表現活動として展開してきた。この手法による作品制作は、地域ごとに異なる特性を反映し、それぞれの文脈に応じた創造的行為が行われている。

具体的には、地域ごとに写し取るモチーフを選定し、使用するメディアを決定する。また、写し取られた作品をプロジェクトとしてどのように展開し、最終的に展示する場を選定するかは、その地域に受け継がれてきた文脈を手がかりとしている。このようにして、地域の歴史や文化を背景にした創造的行為が行われ、地域固有の価値が新たなかたちで提示される。

本研究では、筆者が所属する東京工科大学が立地している大田区蒲田での取り組みを一つの事例として取り上げる。この事例を通じて、地域との関わりから見えてくる地域資源のあり方、アートを媒介として地域で活動する意義、そしてアートの地域社会における役割とその可能性を考察することを目的とする。

本論文では、『地域と共にあるアート』を、地域の歴史・文化・社会課題と深く結びつき、住民との協働を通じて創出・発展する芸術活動と定義する。本論では、この概念がどのように形成され、具体的なプロジェクトを通じてどのように展開されるかを考察する。

## 2. 地域とアートの共生の概念

### 2-1 地域特性を活かしたアート

筆者が2006年から継続的に参加している『大地の芸術祭<sup>3</sup>』は、新潟県越後妻有地域の豊かな自然と文化を背景に、地域活性化を目的として定着してきた取り組みである。この地域は、住民の多くがアートに馴染みのない生活を送ってきた土地でありながら、アートを通じた地域振興のモデルとして注目されている。

『大地の芸術祭』は、新潟県が地域課題（過疎化、高齢化、農業政策の転換、豪雪地帯の過酷な環境）に対処するため、2000年から3年に1度のペースで計画・開催されてきた。当初は地域振興のための施策の一環であったが、現在では世界最大規模の国際芸術祭に発展している。この芸術祭では、アーティストが地域のモノ、産業、歴史、住民、環境などの独自の文脈を発見し、それを創造的に再解釈する過程で住民と協働しながら作品づくりを行う。こうした取り組みにより、地域の文脈を再評価し、それを未来へと継承するプラットフォームとして重要な役割を果たしている。[1] [2]

そして、本研究で取り上げる東京都大田区での活動「オオタノカケラ」の発案にも、この『大地の芸術祭』での経験が大きく影響している。地域で営まれてきたくらしや自然とアートの関係を重視し、住民との協働を通

1 フロッタージュは、物体の表面に紙を置き、その上を鉛筆やクレヨンなどでこすることで、物体の形状や質感を写し取る技法である。もともとシュルレアリスムの画家マックス・エルンストによって20世紀初頭に提唱され、アートの手法として広く使用されるようになった。本研究では、町工場で使用されていた道具の形や痕跡を記録し、作品化するプロセスに活用されている。

2 サイトスペシフィックとは、特定の場所や環境に密接に関連したアート作品やプロジェクトを指す用語である。この概念は、作品が展示される物理的な空間だけでなく、その場所が持つ歴史的、文化的、社会的な背景を考慮し、それらを作品の一部として取り込むことを特徴とする。本研究では、町工場や工場長屋といった地域固有の空間や文脈を活かした作品制作や展示活動において、このアプローチが採用されている。

3 大地の芸術祭は、新潟県十日町市と津南町を舞台にした世界最大規模の国際芸術祭である。2000年に初開催され、以降3年に1度開催されている。NPO法人越後妻有里山協働機構が運営を担い、地元住民、アーティスト、行政、企業スポンサーが協働する形で実施されている。地域資源を活用した作品制作のほか、展覧会期間中には住民が会場管理や来場者対応を行い、地域とアートを結びつける活動が行われている。本研究では、「みどりの部屋プロジェクト」の具体的な取り組みを通じて、大地の芸術祭の運営形態やその地域社会への影響について考察する。

じた作品制作のあり方から多くを学ぶことができた。そして、筆者が2006年から2024年まで『大地の芸術祭』で取り組んだ「みどりの部屋プロジェクト」(図1)を通じて、地域に根づいている土地の生活文化や受け継がれている営み、そこでの営みを作品に取り込む手法を探求し、アートが地域のアイデンティティや産業と結びつく可能性を見出した。

## 2-2 大地の芸術祭での事例(みどりの部屋プロジェクト)

ここで、『大地の芸術祭』で取り組んだ「みどりの部屋プロジェクト」を事例として取り上げる。このプロジェクトは、地域住民との協働を基盤とし、地域資源である自然環境(葉)を媒介に、人々のつながりを創出し、地域資源の再認識や地域コミュニティの発展を目指して展開してきた。

本プロジェクトは、地域住民と来訪者の協働によって成り立っており、葉っぱづくりのワークショップや展示制作活動を通じて、地域の人々がアート制作に直接関与する形態をとる。こ



図1 みどりの部屋プロジェクト(2024)

このアプローチにより、地域住民の誇りやアイデンティティを強くし、新たな価値創出に貢献している。さらに、プロジェクトに参加した住民や訪問者の中で地域文化や自然環境への理解が深まり、外部者との交流を通じた社会的結束の促進が図られた。

「みどりの部屋プロジェクト」が2006年から18年にわたり継続できた背景には、地域住民との合意形成と協働があったことによる。本プロジェクトは、アーティストが集落の住民や周辺地域の協力を得ながら進行してきた。企画の段階から地域の合意を得ることに加え、会期中の会場管理に住民が主体的に関わる体制が整えられていたことが、継続の基盤を形成している。

さらに、作品制作において住民や来場者が直接参加できる仕組みを設けたことも継続性を支える重要な要因である。本プロジェクトでは、毎回新しい葉っぱを増やすために、集落や周辺地域でワークショップを開催し、住民との交流を図ってきた。コロナ禍においても活動を止めることなく、葉っぱづくりキットを郵送する取り組みを通じて、遠隔地の参加者ともつながりを維持した。さらに、会期中でも来場者が作品制作に参加できる仕組みを取り入れることで、リピーターを多く生み出し、作品そのものが多くの人々に支えられている背景にもなっている。

このように、地域住民や参加者との協働、継続的な交流、そして時代や状況に応じた柔軟な対応が、本プロジェクトの長期的な継続を可能にしてきたのである。これらの取り組みは、単に地域文化の保存にとどまらず、地域と外部者との新たな関係性を築くモデルとしての意義も併せ持っている。

本プロジェクトにおける取り組みは、地域社会の独自性を再評価し、それを住民や外部者と共有する機会を提供するものである。また、社会的結束や地域アイデンティティの再構築を通じて、地域の持続可能な発展を支える基盤となる可能性を示している。この経験を基に、「オオタノカケラ」では、東京都大田区蒲田の町工場に焦点を当て、地域資源や地域文化をアートの視点から再考するアプローチを展開した。

### 3. 大田区蒲田の事例：地域資源を媒介とするアート

#### 3-1 大田区地域の成り立ち

まず、大田区蒲田を含めた地域の成り立ちについて考察する。隣接する大森地域の海は、海苔の養殖に非常に適した環境を有しており、その歴史は 1600 年代後半にさかのぼる。明治時代に入ると、海苔の養殖は一大産業として成長を遂げ、大森地域の経済発展を支えた。最盛期には 2000 を超える海苔漁師の家庭が存在したとされている。しかし、昭和 38 年、高度経済成長期に伴うインフラ整備の進展により、海苔養殖は突然終焉を迎えた。高速道路の建設や埋め立て事業が進む中、漁業権の放棄が余儀なくされたのである。



図2 東京都市計画地域指定参考図（大正8年）市政専門図書館蔵。

一方、大田区における都市の成り立ちに影響を与えたのは、大正8年に制定された都市計画法および市街地建築法である。この法整備を契機に、蒲田から臨海部に至る地域では都市整備が進められ、市街地建築物法施行区域<sup>4</sup>として工業地域の用途指定がなされ、工業化が加速していった。（図2）さらに、大正12年（1923年）の関東大震災では、都市部の被害が甚大であったのに対し、大田区は比較的軽微な被害で済んだ。このことが逆に工場の進出を促進する要因となり、地域の工業化が進展した。

昭和6年の満州事変以降、工場数は急増し、特に機械金属や電機関連の軍需産業が活発化した。戦争に向けた軍需生産の拡大が、大田区の産業のルーツを形作ったといえる。そして昭和20年、軍需工場が密集する大田区は、空襲の主要な標的となり、19回にも及ぶ空襲により地域の半分が焦土と化した。[2]（図3）

しかしながら、戦前から培われてきた金属加工技術やものづくりへの気概は、復興の道筋を示す原動力となった。この技術的基盤が、戦後の近代工業の礎となり、大田区の経済的発展を支える結果となった。[3]

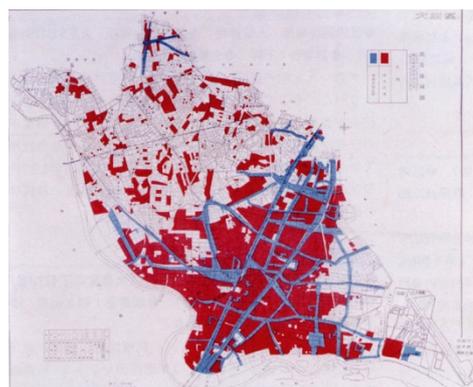


図3 戦災区域図（昭和21年）『大田区政十年』付録

また大田区は、1947年に旧大森区と旧蒲田区の合区により誕生した地域である。旧大森区は東京湾沿いの海苔養殖や漁業で栄え、旧蒲田区は中小の町工場が集積し、日本の近代工業の礎を築いた地域として発展した。この二つの地域が統合され、大田区となったことで、工業地域としての発展が加速し、町工場は航空機・自動車・精密機械産業を支える中小企業の集積地へと発展していった。こうして、大田区は水産業を基盤とした地域から工業地域へと大きく変貌し、新たな都市文化を形成していった。

「オオタノカケラ」では、大田区のこの歴史的背景を踏まえ、町工場の文化や産業遺産に着目。町工場の道具や建屋等をフロッタージュ技法を用いて記録し、「工場まち」としての記憶を可視化する試みを行っている。このように、本プロジェクトは、大田区の形成過程と産業の発展を反映した都市での住民参加型アートプロジェクトとして展開している。

<sup>4</sup> 市街地建築物法施行区域とは、大正時代に制定された「市街地建築物法」に基づき、建築物の防火性能や衛生条件を確保するために特定の規制が適用された区域を指す。この法律は1920年（大正9年）に施行され、都市計画の一環として、特に火災防止や建築密集地の安全性向上を目的として設けられた。本研究では、大田区蒲田周辺が同区域に指定され、工業地域として発展していく背景として触れられている。

### 3-2 大田区のものづくり

現在、大田区は東京 23 区の中で最も工場数が多く、その多くが「試作・少量生産」を特徴としている。これらの町工場では、すべての製造工程を内製化する一方で、特定の工程を地域内の他社に外注し、互いにネットワークを形成する「仲間まわし」と呼ばれる仕組みが特徴的である。このような中小企業間の連携は、地域経済社会の発展を支え、大田区の地域文化を形作る要因となり、特有の地域資源を生み出してきたといえる。

しかしながら、大田区の製造業における事業所数は近年減少傾向にあり、かつてのように工場が集積することで好循環を生み出していた状況は厳しさを増している。工場閉鎖後の建物は、駐車場や戸建て住宅、マンション、さらには福祉施設へと転用されることが多い。このような土地利用の変化は、地域の産業文化に影響を与えるとともに、新たな課題を生じさせている。

特に、伝統的な製造業が操業を続ける一方で、新たな住民が流入する準工業地域<sup>5</sup>では、生活環境や価値観の違いによる摩擦が懸念されている。これにより、地域の産業文化と新しい住民のニーズがどのように共存するかが問われる状況にある。地域資源としての産業文化を維持しながら、新たな住民を含めたコミュニティ形成や、生活環境の調整を進めるための取り組みが求められている。

### 3-3 地域の営みや生業の魅力をアートに転換

2010 年に筆者が大学に着任したことを契機に、大田区での生活が始まった。その後間もなく、まちづくりに関する NPO 団体が企画するアーティスト・イン・レジデンス<sup>6</sup>に、大田区在住のアーティストとして参加する機会を得た。このプロジェクトは「大田区のものづくり」をテーマとして掲げており、筆者は町工場をリサーチする中で、このアートプロジェクトの起源となる 1 軒の町工場（図 4）と出会うこととなった。

この町工場は、昭和時代の懐かしさを感じさせる木製の窓枠や裸電球が特徴的な空間であった。工場内には、89 歳で亡くなった職人がつい 1 カ月前まで稼働させていた痕跡がそのまま残されており、まるで今も作業が続いているかのような気配が感じられた。その空間には、職人の手仕事やものづくりの営みが持つエネルギーが強く宿っており、これを地域のために活用したいという工場所有者の意向を受け、筆者がアートプロジェクト「オオタノカケラ」を構想するきっかけとなった。

『みどりの部屋プロジェクト』と同様にフロッタージュ技法を活かし、手仕事としての「ものづくり」の記憶を職人が遺した道具などを記録することで、町工場における“土地の記憶”を視覚化する手法を採用。地域住民や職人との協働を重視し、アートを通じたまちの記録と継承のあり方を探求する点においても、『大地の芸術祭』の実践が本プロジェクトの基盤となっている。

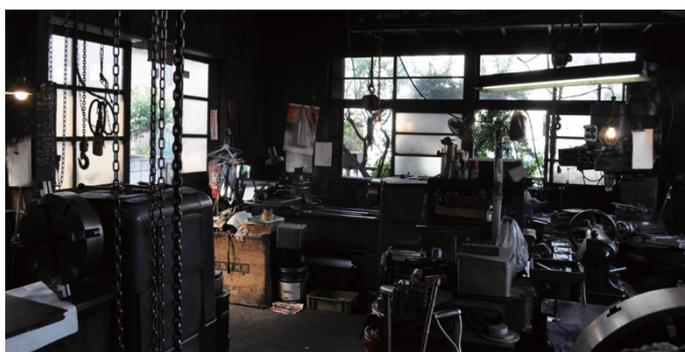


図 4 見学时に撮影した綱島製作所（大田区北糀谷）

<sup>5</sup> 準工業地域とは、日本の都市計画法に基づく用途地域の一つで、主に軽工業施設や小規模な工場の立地を想定した地域を指す。この地域では、住宅や商業施設の建設も許可されており、工業と居住環境が共存する特性を持つ。しかし、大規模な工場や環境負荷の高い施設の設置は規制されている。本研究では、大田区蒲田周辺が準工業地域として発展し、町工場が集積する一方、新たな住民の流入による生活環境の変化や摩擦が課題として浮き彫りになっている。

<sup>6</sup> アーティスト・イン・レジデンスとは、アーティストが一定期間特定の地域や施設に滞在し、地域住民や団体と協働しながら創作活動を行うプログラムを指す。滞在先の文化や歴史、住民との交流を通じて、地域に密着した作品制作が行われる点が特徴である。本研究では、大田区で活動する NPO 法人「大森まちづくりカフェ」の依頼により、筆者がアーティスト・イン・レジデンスに参加し、町工場をテーマに地域特有の資源を活用したアートプロジェクト「オオタノカケラ」を展開した。この活動は、地域文化の継承や住民との交流を深める機会となった。

町工場の中には、職人が作業に応じて独自に製作した治具<sup>7</sup>や、摩耗して独特の形状となったハンマーの柄など、手仕事の痕跡が刻まれた道具が数多く残されていた。これらの遺品ともいえる道具類（図5）は、かつてのものづくりの姿を鮮明に物語るものであり、現在ではほとんど見られなくなった貴重な文化的資源である。これらの道具をモチーフに、筆者は多くの人々が参加できるワークショップを企画・実施し、町工場の魅力や価値を広く共有する取り組みを進めた。

このプロジェクト<sup>8</sup>を通じて、地域に残された町工場の魅力やものづくりの歴史をアートに転換し、地域住民や外部の人々に体験を通じて共有する試みが行われた。工場の中で感じた職人の「手の痕跡」や「作業の痕跡」を多くの参加者とともに共有することで、地域の営みを再評価し、持続可能な文化資源として活用する可能性を示した。



図5 町工場に遺された職人が使った道具類

### 3-4 ワークショップを通じたものづくりの記憶の共有

このワークショップでは、旋盤工の職人が使用していた道具をテーブルに置き、その上に紙を重ねて色鉛筆でこすり、道具の形を写し取るフロッターージュ技法を用いている。また、色鉛筆には地域資源固有の色を採用しており、町工場の油が染み込んだ床の色や、錆びた鉄の色を選定し、プロジェクト全体で統一した色合いとして扱っている。（図6）

実物と同じ大きさで道具を写し取るこの作業では、色鉛筆を通じて触感や形状を感じ取る体験が重要である。紙を通して浮かび上がる道具の微細な傷跡や、長年にわたる使用によって刻まれた痕跡は、視覚では気づけない情報をもたらす。また、意図した通りに形を写し取る難しさを体験する中で、道具を使用していた職人の存在やものづくりの記憶に触れることができる。このプロセスでは、参加者が道具と向き合いながら、職人の温もりや作業の積み重ねを感じ取り、自身の感性と重ね合わせることで作品が完成する。

このプロジェクトは「オオタノカケラ」と名づけられている。「カケラ」という言葉は漢字で「欠片」と書き、不完全なもの、一部が欠けたものを指すネガティブなイメージがあるが、このプロジェクトでは異なる意味を込めている。大田区のものづくりにおいては、町工場の職人たちがそれぞれのパーツを高い精度で仕上げ、それらが仲間同士の連携を通じて一つの完成品となる。こ



図6 ワークショップでのフロッターージュによる作品づくりの様子

<sup>7</sup> 治具とは、製造や加工の際に、部品の位置を正確に固定したり、作業を効率的かつ正確に行うために使用される補助的な工具や装置を指す。一般に、加工や組み立ての工程で部品を正確な位置に保持するために使われ、製品の品質向上や作業時間の短縮に貢献する。特に町工場では、特定の作業や製品に合わせてオーダーメイドで製作されることが多く、その形状や機能には職人の創意工夫が反映されている。本研究では、町工場の歴史的遺物として、治具が職人技術やものづくり文化の象徴として重要な役割を果たしていることを考察している。

<sup>8</sup> この「オオタノカケラ」の活動は2014～2016年度の科学研究費助成事業「アートをまちにひらくことによる新たな地域振興と芸術表現のかたち」（課題番号26360079）の支援を受けて実施され、引き続き2017～2022年度の科学研究費助成事業「地域資源を活かした新たな地域振興と芸術表現のかたち」（課題番号17K02136）の支援を受けて実施された。

れにより、最先端のロボットやロケットといった高付加価値製品に貢献している。プロジェクト名には、こうした職人たちの技術と連携が「オタカラ（一字とぼしで可読）」にも等しい価値を持つという思いがネーミングにも込められている。

### 3-5 フロッタージュを通じた文化的アーカイブの構築

フロッタージュ技法は、参加者と共に作品を制作することを主な活動としているが、それにとどまらず、町工場という地域資源を文化的なアーカイブとしてどのように保存し、活用するかを考える取り組みでもある。

フロッタージュは、物の表面を写し取ることで、その質感や形状を忠実に記録する手法であり、単なる視覚的再現ではなく、物理的な接触を伴う記憶の転写とも言える。この技法を活用することで、町工場の設備や道具の表面に刻まれた時間の痕跡を可視化し、記録することが可能となる。つまり、フロッタージュは物理的なモノとしての町工場の文化資源を、時間軸を超えて保存するアーカイブとしての機能を持ち得るのである。

本プロジェクトにおいて、フロッタージュは単なる記録行為にとどまらず、町工場の経営者や職人、地域住民と共に、大田区のものづくり文化の意味や歴史を再考する場を生み出す。制作の過程で、彼らの証言や経験が共有されることで、アーカイブは単なる物質的な記録ではなく、語られた記憶や価値観の集積へと変化していく。これにより、技術の保存だけでなく、地域社会の中で技術や文化の意味を継続的に問い直し、更新していく仕組みが構築されるのである。

町工場は、大田区の技術力を象徴する存在であり、その多様性には特筆すべきものがある。例えば、最先端の工作機械を導入し、24時間稼働する工場もあれば、伝統的な道具を用いて手仕事にこだわる工場も存在する。どちらが優れているということではなく、これら双方の特性が大田区全体の技術力を支えているといえる。

この活動は、町工場の増加やものづくり技術の向上を直接の目的とするものではない。それよりも、大田区の地域資源である町工場やその背景にある土地、人々の営みを継承し、再評価することに重きを置いている。これらの価値を地域住民と共有し、さらに可能な限り広く伝え、次世代へとつなげていくことを目指している。

このような活動には、地道な努力が求められると同時に、継続的な取り組みを支える仕組みづくりが必要である。その中で、地域資源の保存と活用を持続可能な形で行い、地域社会と共生する道を模索している。これにより、地域に根ざした文化的アーカイブが形成され、地域のアイデンティティーや町工場の価値が次世代にわたって伝承される可能性が高まる。

フロッタージュを通じた文化的アーカイブは、一過性のアートプロジェクトにとどまらず、地域の技術や職人文化を次世代へ継承する持続的なシステムへと発展する可能性を持つ。例えば、ワークショップを通じて市民が参加し、自らの手で町工場の記憶をアーカイブする仕組みを導入すれば、地域住民の主体的な関与が促される。また、デジタルアーカイブとの連携により、これらの記録をより広く発信することが可能となり、地域の産業や文化がより多くの人々に認知され、活用される機会が増えるだろう。

### 3-6 町工場の独特な営みとその価値

これまでの活動を通じて、町工場の営みが持つ独特な様態が明らかになってきた。町工場は高度な加工技術に特化している一方で、クライアントからの無理難題なオーダーに対して柔軟に対応する能力も備えている。この柔軟性そのものが、町工場のクリエイティブな側面を象徴しているといえる。

例えば、狭い町工場では対応が難しい長尺の材料加工において、機械を動かさない状況下で壁に穴を開けて加工を行ったという事例がある。壁の向こう側が生活空間（風呂場）であったため、家族が協力して作業を進めた。このような住工一体型の作業環境は、町工場ならではの特徴的な形態であり、生活と仕事が密接に結びついている点で興味深い。

さらに、町工場の建物自体も独特な進化を遂げている。増築や改修を繰り返した結果、一見外観からは内部構造が分からない建物も多い。背丈の低い建物や単管パイプを用いて組み立てられた簡易な構造物など、実用性を優先した創意工夫が随所に見られる。また、屋上に倉庫を設け、物資の上げ下ろしを行う仕組みが備えられているなど、建築基準法的な視点では曖昧な部分もあるが、こうした構造物も町工場の営みの延長線上にある。（図7）



図7 多様な町工場の建造物

これらの事例は、ものづくりの創造性が建築や生活空間にも波及していることを示しており、地域の工場まちの文化的資源として非常に価値が高い。しかし、町工場の減少とともに、このようなユニークな特徴を持つ建物や作業環境が評価されないことで次々と失われているのが現状である。このような状況だからこそ、町工場の営みを記録し、その価値を可能な限り保存していくことが必要である。

### 3-7 アートを通じた展示と地域の理解促進

アートを活用した活動において、多くの人々と制作した作品を展示することは、単なる作品発表の場にとどまらず、関わった人々との貴重な交流の場を提供する重要な取り組みである。このような活動では、展示場所の設定がコンセプトを伝える重要な要素となる。本活動では、戦前から残る古い工場長屋を借りて展示を行った。通常では立ち入ることができない町工場に来訪者を迎え入れること自体が、この活動の目的の一つでもあった。

展示方法もアートによる表現の一部と位置付けられる。本活動では、展示をインスタレーション（仮設設置）として構成し、個々の作品が「カケラ」として独立しながらも、つなぎ合わせることで一つの大きな作品に仕上がるよう工夫した。このアプローチは、大田区町工場の「仲間まわし」のような連携を象徴的に取り入れている。例えば、工事現場の足場を仮に組み上げた構造体を設営し、研究内容を伝えるポスターを設置するほか、参加者が制作した作品をクリップで吊るし横につなぐことで、空間全体を活用した視覚的なインパクトを生み出した。（図8）このような展示は、作品の鑑賞だけでなく、人々との交流や工場への理解を深めるイベントとしての役割も果たしている。

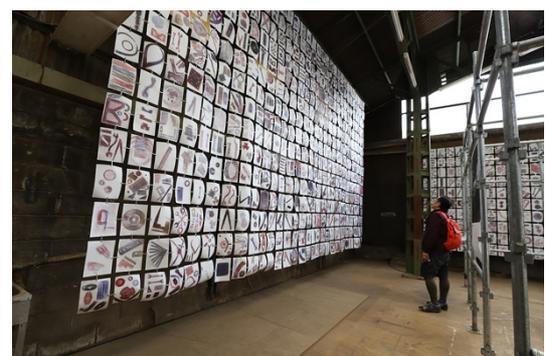


図8 オオタノカケラ 2020（大田区大森南せき工場）

2020年の展示では、コロナ禍の緊急事態宣言の影響により計画を実現することはできなかったが、2016年の展示では町工場の象徴ともいえるドラム缶を活用し、作品をベルト状につなぎ表現を試みた。また、職人が使用する道具の美しさにも着目し、道具展を企画した。これらの道具は用途に応じた合理的な形状を持ち、使

い方を知ることによってその機能美を理解できる。このような展示を通じて、町工場の文化的価値を多くの人に伝えられている。

さらに、町工場のアーカイブ構築にも取り組んでいる。古い写真を地域住民から借り受けたり、譲り受けたりすることで、町工場の歴史や営みを記録し、保管する活動を継続している。これに加え、ワークショップを定期的で開催することで、参加者が町工場の体験を通じてものづくりを学び、地域文化への理解を深める機会を提供している。

また、現在も稼働中の町工場を案内する工場見学も企画し、まちづくりやものづくりへの関心を持つ幅広い層の参加者を迎えている。特筆すべきは、女性参加者の割合が高い点であり、男女問わずさまざまな視点を持つ人々が町工場の価値を再発見する場として機能している。[3]

## 4. 地域と共にあるアートの定義

### 4-1 地域とアートの相互作用

地域と共にあるアートとは、単に地域を題材として利用するアートではなく、地域の特性や課題、住民の生活に深く根ざし、地域とアーティストが相互作用しながら共創を行うプロセスに基づくアートである。本研究で取り上げた事例では、町工場の資源や歴史、住民との交流を通じて、地域が持つ独自の文脈をアートへと昇華させる取り組みが行われてきた。

具体的には、筆者がこれまで地域で行なってきたフロッタージュ技法を用いたワークショップが示すように、地域資源の物理的な形や触感を通し、作品化することで、地域の記憶や文化を新たな形で共有する試みが行われた。このように、アートが地域の文脈を再評価し、それを次世代に継承する役割を果たす点が特徴である。

### 4-2 地域特性を活かした創造

地域と共にあるアートは、以下の要素を含むことで成り立つと考えられる。

1. 地域資源の活用：地域に特有の資源（自然、建物、産業、歴史）を素材として取り入れる。  
例：工場長屋を展示会場とし、町工場の道具を作品のモチーフとして使用。
2. 住民参加と共創：地域住民がアートの創作や展示に参加し、アートを通じて交流を深める。  
例：フロッタージュ技法によるワークショップや、工場見学を組み合わせた活動。
3. 持続可能性の追求：アート活動を通じて、地域資源や文化を継承し、地域社会の持続可能性を高める。  
例：古い道具や写真などの記録を収集・保存するアーカイブ構築活動。

これらの要素は、アートを媒介として地域資源を再解釈し、新たな価値を生み出す創造的なプロセスの中核を成す。

### 4-3 地域と共にあるアートの意義

地域と共にあるアートの意義は、単に美的な体験を提供するだけでなく、地域社会に多面的な影響を与える点にある。以下の3つの観点からその意義を整理する。

1. 文化的意義  
地域の記憶や歴史を保存し、アートとして再解釈することで、地域文化の価値を再評価する。  
例：ワークショップや道具展などのアーカイブ活動を通じた町工場文化の継承。
2. 社会的意義  
住民や外部者がアート活動を通じて交流し、社会的結束を高める。  
例：工場見学や展示会での交流が新たなコミュニティ形成を促進。

### 3. 経済的意義

アート活動が地域の活性化や観光誘致につながり、地域経済に貢献する。

例：大田区町工場の技術を象徴としたイベントが地域ブランド化の一助となる。

#### 4.4 地域と共にあるアートの定義

以上の考察を基に、『地域と共にあるアート』を次のように定義する。

地域と共にあるアートとは、地域資源や文脈を活用し、地域住民とアーティストが協働して創造活動を行うことで、地域の価値を再解釈・発信し、文化的、社会的、経済的持続可能性を高めるアート活動である。

この定義は、具体的な事例（オオタノカケラ）に基づきながら、他の地域や分野にも応用可能な普遍的要素を含んでいる。地域特性に基づくアートの実践は、地域社会に新たな価値を創出し、未来へとつなぐ手段としての可能性を示している。

## 5. 考察：定義の実践的意義と課題

### 5.1 地域と共にあるアートの可能性

地域と共にあるアートは、地域特性を活かした創造的活動を通じて、文化的、社会的、経済的な価値を生み出す可能性を持つ。本研究の事例である「オオタノカケラ」では、町工場の物理的資源（道具、建物）、文化的資源（職人技術、地域の記憶）、人的資源（住民、参加者）が複合的に活用され、新たな価値創出のプロセスが示された。このような取り組みは、地域資源を単なる「過去の遺産」として保存するだけでなく、地域の記憶や文化資源を継続的にアーカイブしながら、地域との対話を重視する点に特徴があると考えられる。

地域住民や外部参加者がアートを介して交流し、共通の体験を共有することで、新たなコミュニティが形成される可能性も示唆される。特に、参加者が自らの感性を用いて町工場の道具や歴史に触れることで、地域の記憶と自己の感覚が重なり合い、新たな発見や価値の再認識が促される。このプロセス自体が、地域の活性化や社会的つながりの再構築に貢献しているといえる。

### 5.2 地域と共にあるアートの課題

一方で、地域と共にあるアートにはいくつかの課題も存在する。第一に、アート活動の持続可能性をいかに確保するかが重要な課題である。町工場の減少や地域の高齢化が進む中で、地域資源を継続的に活用し、アート活動を発展させるには、地域住民や行政、アーティストの協働体制を強化する必要がある。

第二に、外部者との関係性の構築である。外部からの参加者や観光客を取り込むことは地域活性化の一助となるが、外部者の関与が地域文化の表層的な消費に留まり、地域住民の本質的な価値観や文化が軽視されるリスクも存在する。そのため、外部者が地域に深く関与し、地域特性を理解する仕組みづくりが求められる。

第三に、アート活動が地域にとってどのような具体的な利益をもたらすのかを明確にする必要がある。アートを通じた交流や文化継承の意義が必ずしも短期的な経済効果に結びつくわけではないため、長期的な視点で活動の意義を評価し、地域全体でその価値を共有する必要がある。

### 5.3 今後の展望

今後、地域と共にあるアートを発展させるためには、いくつかの方向性が考えられる。まず、アート活動を支える持続可能な仕組みづくりが重要である。地域住民、アーティスト、行政や外部組織が連携し、地域資源の活用や保存に取り組むとともに、アート活動を長期的に支えるための財源確保やネットワーク構築を進める必要がある。

また、デジタル技術の活用によるアーカイブ構築や情報発信も今後の可能性として挙げられる。例えば、町工場の道具や建物をデジタルスキャンし、仮想空間で再現することで、物理的資源が失われてもその価値を継承する仕組みを構築できる。

さらに、地域と共にあるアートの意義を広く共有するために、教育やワークショップを通じた普及活動を強化することが求められる。地域住民だけでなく、外部の若い世代にも地域文化やものづくりの価値を伝え、新たな担い手を育成することが重要である。

そして今後の研究では、自ら定義した『地域と共にあるアート』というものが、既存の研究や表現活動、隣接分野の活動や議論とどのように関連しているのかを明確にする必要がある。そして具体的な事例の比較を通じて、「地域と共にあるアート」の実践が他の地域にどのように適用可能かをさらに検討していく必要がある。

#### 5-4 最後に

『地域と共にあるアート』は、地域資源を活用した文化創造の可能性を示す一方で、持続可能性や関与の深さといった課題を伴う。本研究で取り上げた事例は、これらの課題に対する解決策を模索しながら、地域文化の継承と発展に寄与する道筋を示している。今後、さらに多様な地域や分野でこの取り組みが応用され、地域社会の新たな価値創造に貢献することが期待される。

#### 謝辞

本研究の遂行にあたり、多大なるご支援とご協力をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。

まず、本プロジェクトで使用した色鉛筆をご協賛いただいたホルベイン画材株式会社には、心より感謝申し上げます。アートプロジェクトの実現にご協力いただいた大田区の地域住民の皆様、町工場を運営されている事業者の皆様、特に貴重な資料や会場を共有してくださった綱嶋毅泰様、ギャラリー南製作所水口様、せき工場忽那様、元大田区立郷土博物館学芸員北村敏様、NPO 法人大森まちづくりカフェの皆様、関係各位に心よりお礼申し上げます。また、ワークショップや展示活動にご参加くださった皆様とデザイン学部卒業生各位には、地域文化の価値を共有し、ご支援をいただいたことに感謝いたします。

#### 参考文献

- [1] アートと経済社会について考える研究会, 「アートと経済社会について考える研究会報告書」, 経済産業省, 第3章アートと地域, 1.地域にアートが求められている背景, p. 129-134, 2023年
- [2] 地方創生総合情報サイト, 「アートでまちを元気にする -世界最大規模に発展した大地の芸術祭 新潟県十日町市」, 内閣府  
[https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10349752/www.cao.go.jp/chihouseusei\\_info/jireisyu/niigata/niigata.html](https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10349752/www.cao.go.jp/chihouseusei_info/jireisyu/niigata/niigata.html)
- [3] 大田区立郷土博物館, 特別展「まちがやって来た-大正・昭和 大田区のまちづくり-」図録, 大田区立郷土博物館, 2015年
- [4] 環境芸術学会 学会誌委員会, 学会誌 32号「第24回大会報告&論文 産業と芸術と人の関わり、大田区から未来へ」, 環境芸術学会, 大会企画A 講演 地域環境から生まれるもの 過去から現在, 酒百宏一, p.15-19, 2024年